

蔭桔梗

かげきぎょう

泡坂妻夫





かげきぎょう

蔭枯梗

泡坂妻夫

発行 ■ 一九九〇年二月二〇日

二刷 ■ 一九九〇年七月一五日

著者 ■ 泡坂妻夫
あわさかつまお

蔭桔梗
かげ きき きょう

発行者 ■ 佐藤亮一 発行所 ■ 株式会社新潮社

郵便番号一六二ノ東京都新宿区矢来町七一ノ電
話〇三十二六六一業務五一二一・編集五四一一
ノ振替東京四一八〇八

印刷所 ■ 大日本印刷株式会社

製本所 ■ 株式会社大進堂

©Tsumao Awasaka 1990. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-347203-0 C0093

価格はカバーに表示してあります。

蔭
枯
梗

弱竹さんの字

105

蔭
桔
梗

83

簪

69

絹
針

41

遺
影

29

増
山
雁
金

5

校舎借別

213

色揚げ

193

くれまどう

169

竜田川

141

十一月五日

119

装幀
蓬田
やす
ひろ

增山雁金

「増山雁金」というちよつと変わった紋がある。

増山は家の名で、伊勢長島藩二万石、譜代の大名だった増山家のこと。江戸城では雁間詰で、それと関係があるのかどうか判らないが、この大名の定紋が増山雁金。

雁という鳥は昔から歌に詠まれたり、絵に描かれたりして、ごく馴染み深い渡り鳥だ。雁の飛ぶ姿は様式化されて文様となり、それが進んで家の紋にも用いられてきた。『寛政重修諸家譜』という資料には、その時代、雁の紋を使っている武家は五十家を算えるという。雁を素材とした紋そのものは決して少なくはない。

最初から話が傍にそれるようで恐縮だが、昔の人は雁を簡略な図で描くとき、Vの字を鈍角にした∨型を使った。∨型になつて空を飛んでいる鳥は雁ばかりではないのだが、それだけ雁が愛されたということだろう。∨型に描かれた鳥は鴨でも鳥でもなく、雁に限定されていて、∨は図というより文字の方に近い。従つて、紋にされた雁金の形も、古式ゆかしい∨型で描かれている。

ところで、面白いと思うのは、∨型とは別に、 \times 型をした雁金があることだ。紋ではこれを「結び雁金」という。紋を作るときのパリエーションの一つに「結び」という変形法があつて、紐を結んだ形で素材の姿に迫ろうとする発想だ。「結び柏」「結び梅」「結び桔梗」などがその例。形としての面白さの他に、呪いとしての意味が含まれているらしい。結び雁金もその系列の紋か

と、最近までそう思っていたのだが、最近ちよつと違うことに気付いた。というのが『一遍上人絵伝』という古い絵巻物の中に、ちゃんとゞ型の雁が描かれているからだ。つまり、昔から雁はゞ型とゞ型とがあつて、結び雁金はバリエーションではなく、ゞ型の雁から作られた紋らしい、ということだ。

さて、本題に戻つて、増山雁金。

これは丸の中に二羽のゞ型の雁金を斜めに並べた紋で、二羽の雁金は嘴を左に向け、左上方に向かつて飛んでいる。雁金という素材は紋として決して少なくないと書いたが、作図という点から見ると、この増山雁金はかなり特殊な例だ。

人が作り出した模様のおおくは左右対称をしている。見ていて美しいし、安定感がある。その模様の粋を集めたともいえる紋も、その九〇パーセント以上は左右対称だ。ただ、増山雁金が別で、この対称軸は斜めにかしいでいる。このような例はほとんどなく、わずかに月しか思い出せない。左上方を向いている三日月の紋が、矢張り対称軸を斜めにしてゐる。

この紋を最初に描いた人は、別に奇を衒つたわけではない。雁行という言葉があるとおり、斜めに飛んで行く雁や斜めの三日月を写して、自然に対称軸の傾いた紋ができあがつたのである。あるとき、この増山雁金の仕事が出て、ちよつとごたつたことがあつた。

出来上がった紋を見て、その着物を誂えた客が、家の紋とは形が違う、と言ひ出したのだ。「そんなことはありませんよ。僕が描いたのが正しい増山雁金です」と、私は主張した。

「嘴が違う、とお客さんが言うんです」

と、内田屋さんは真新しい畳紙を開け、躰の付いたままの喪服を拵けて見せた。

二週間ばかり前に仕上げた品物だから、まだよく覚えてる。

黒羽二重の五つ紋の着尺地。昔からのやり方だと、まず、客が白生地を見立て、それを黒染屋に廻す。染屋では白生地の上に雁金なら雁金の形のとおり糊を置いて黒に染める。染め上がったから紋糊を落とし、上絵師に廻す。上絵師は雁金の目や嘴といった細かい部分を描いて、全体の形を正して仕上げる。

内田屋さんが持って来た着尺地はそうした手続きが省略されていて、すでに黒く染められて紋のところは円形に染め抜かれている。これを石持と言う。上絵師はこの石持の中に紋を入れるのである。石持着尺は大量生産のために考えられた方法だが、欠点がある。石持の中に摺り込まれた染料は、余分な染料を洗い流す水もとという作業ができないために、雨などに会うと、その染料が流れ出してしまうときがある。これを「紋が泣く」と呼んでいる。

「お宅で入れてもらった増山雁金は、上の雁金が口を開け、下の雁の方は口を閉じているでしょう」

と、内田屋さんが言った。

「そう。それを阿吽と言うんです。浅草の仁王さんでも、神田明神の狛犬でも皆同じでしょう。二体がセットになっているものは、一体が口を開き、一方は口を結んでいるのが昔からの仕来たりです」

と、私は内田屋さんに紋帳を見せた。紋帳と寸違わぬ紋を着物に描くのが仕事だから、雁金の目付きや嘴が気に入らないといつて、勝手に直すことができないのが上絵師だ。

「そうなんでしょうねえ」

内田屋さんは、私の主張は認めたものの、困り切った顔で言った。

「でもその家の紋は違うらしいんですよ。二羽の雁金とも、口が閉まっているんですがねえ」

「じゃ、阿吽でなくて、うんうんになってしまいますよ」

「うんうんでも、その家の紋は、そうなんです」

「じゃ、増山雁金じゃないんでしょう」

「お客さんは、家の増山雁金はそうなんだと言うんです。他の留袖を見せてもらいましたけど、ちゃんと口を閉じている」

「その留袖は内田屋さんが扱ったんじゃないのね」

「そう。内なら、紋のことは全部お宅に持って来るから。初めてのお客さんなんですよ。なんで、今迄出していた洗張屋あらははりやが死んじゃった、とかでね」

「困ったね」

「……困りました」

この、内田屋さんという人、早稲田に店を持っている洗張屋さんで、当時、五十歳ぐらい。ずんぐりした身体と、丸い顔にどこか愛敬がある。人当たりがよくて話好きだ。その頃、月に一度ぐらいの割で私のところへ紋の仕事を持って来ていたが、仕事を置いてもすぐには帰らない。茶を飲みながら、一人でいろいろなことを喋り続ける。

内田屋さんが小僧のころ、その店の客に何とかという講師がいて、よく使いに出来ることがあった。内田屋さんはその講師の家に入出入りしているうち、弟子たちが稽古をしている講談を片端から覚えてしまった。

「どうだい。洗張屋なんかより、講師にならなかいかい」

講釈師は冗談のつもりだったのだろうが、しかし、内田屋さんはかなり本気で弟子入りを考えたというから、根からの話好きなのだ。

その内田屋さん、このときだけは暗い顔になった。理屈は私の方が正しい。しかし、理屈はどうでも、商人は客の注文通りの着物を作らなければならない。内田屋さんはその板挟みいそはさまになっているわけだ。

「誂えを受けたとき、その留袖の紋を見せてもらったの？」

と、私は訊いた。

「ええ、見せてもらいましたよ。でも、嘴みたいな細かなところは、全然気が付かなかった」

「お客さんも、普通の増山雁金とは違うと言わなかったんだ」

「そうです」

じゃ、両方に落度がある。だが、こんなとき、いつも泣きを見るのは、その仕事をした職人の方だ。

上絵師は正確には「紋章上絵師」と言う。電話帳にもそう記載されている。一応は絵師だが、芸術家ではない。

芸術と名が付くと偉いもので、たとえ自分が間違えていても、いや、正しいのは私だ、と言えれば、それが通ってしまう。職人となると全くその点だらしが無い。いくら自分が正しい仕事を納めても、客が違うと言え、それは違う。気に入った仕事でも直さなければならぬ。

どの家にも家風とか、仕来りがある。世間一般の常識とはちよつと違つても、それが家風だといえ、宥ゆるされてしまう。多分、内田屋さんの客もその類いで、先祖が誤つてか、あるいはなにかの理由があつてか知らないが、増山雁金をうんうん雁金と変形して使うようになった。結局、

その人物は、後後まで職人を悩ますことになるのだろう。

「このままじゃ、納まらないんです。紋抜きをして、改めてうんうん雁金してもらいたいんですかね」

と、内田屋さんは言った。

「それは、大仕事だ」

私はうんざりした。

紋に使った染料を薬品で脱色させて元通りに白くする。墨を使ったところは鶯の糞を使う。誰が発見したのか知らないが、鳥の糞には墨の膠を溶かす酵素が含まれているそうで、昔からしみ抜きの材料に用いられている。挿り餌を与えている鳥の糞なら鶯に限らないわけだが、なぜか鶯の糞とされている。まあ、美人のものなら、それも美しかろうと錯覚するのは人の常だ。

今では、業者が精製されたしみ抜き用の酵素を売っている。つまり、鳥屋で只で貰っていたものが、薬品として金を払わなければならなくなった。どうも、今の社会は何かにつけて金を取られる仕組みになっているようだ。

まあ、そのような厄介な手続きを取れば、増山雁金をうんうん雁金に描き直すことが不可能ではない。だが、問題は手間閑のことではなく、丹精をこめて入れた紋を、同じ手で今度は抜いてしまうということが、精神的にひどく苦痛なのだ。

私は、そこで妥協案を出した。

「つまり、上の雁金の口さえ閉じていればいいわけでしょう」

「そうです」

「じゃ、雁金の上嘴を染料で突ついて消してしまおう。その後で、胡粉をちよいちよいと差せば、

嘴が閉じます」

「……うまくいきますかね」

「大丈夫。見たぐらいじゃ判りません。もつとも、光に透かせば胡粉の部分黒く見えますがね」

「仕立てである着物だから、透かして見ることなどないでしょう」

「ですから、何年か後、この着物を解いて洗張りしたようなとき、透かされれば胡粉だということ判つちやいます。まあ、胡魔化しだと言われれば、実際、胡魔化しなんですから」

「つまり……胡粉で直すことをお客さんに納得してもらえればいいわけですね」

「そう。そのお客さん、喧ましい人なんですか」

「まだ、深く付き合っていないから判らないけれど、こんな小さなことに気の付く人ですからね。でも、一応はそう話してみることにしましょう」

ふと、喪服の陰から、意地悪そうなお婆さんの顔が見えるような気がした。

ちよつと常識を外れた家風のある家において、格式や家名にこだわりの先祖が大切、夫が死んでからも元気に長生きして、嫁に家風を正しく継がせようと押し付ける。職人にとっては一番苦手なタイプだ。

内田屋さんがそう言つて帰つてから、二、三日して電話があり、客にわけを話すと、胡粉を使った直して結構だと納得してくれた、と言つてきた。

紋抜きから逃れて、私はほつとした。胡粉を使う直しだから仕事は早い。

その喪服を取りに来たとき、内田屋さんは菓子折を持って来た。

「それでは紋屋さんに気の毒なことをした、とそのお客さんが言うんです」

と、内田屋さんは言つた。

「今までの洗張屋さんは長い出入りで、うんうん雁金のこととはよく承知していて、お客さんが何も言わなくても、ちゃんとしたうんうん雁金にしてくれていたそうなんです。それなら、口が足りなかったわたしが悪い、そう言っつて、このお菓子、紋屋さんに届けてくれるように、と頼まれたんですよ」

内田屋さんは付け加えた。

「うんうん雁金の紋本を一枚作って下さい。私が今はいい機械があるから、コピーしましょうと言うと、いや、最後まで残したいから、ちゃんとした紋本が欲しいということなんです。お宅の仕事、誉めてましたよ。だから、教えてやりました。この紋屋さんは三代目、いまでこそ大塚にいるが、神田で生まれた代代の名人ですから、つて」

内田屋さんはやっといつもの話し方になった。

それで、その客が意地悪そうなお婆さんらしい、という印象は消えたのだが、更に、上品な美しい女性だとまで想像することはできなかつた。

それが、十年ほど前のことで、そのうんうん雁金の喪服を着た女性と、最近、実際に会う機会があつた。

馬屋さんの葬式で、だつた。

馬屋さんという名は、家の中だけでしか通用しない。私が付けたあだ名だからだ。本当の屋号は志摩屋という。

同じ洗張屋でも、内田屋さんと馬屋さんとは性格がまるで違う。体型からして違う。内田屋さんみたい丸っこい感じではなく、馬屋さんは骨太で背が高い。馬屋というあだ名は顔から由

来して、色が黒くて長い顔の中に、まんべんなく目鼻が散っているから、それでなくとも長い顔が余計に長く感じる。年齢は内田屋さんよりずっと老けて見えるが、実際は馬屋さんの方が二つ三つ下らしい。

馬屋さんの態度は馬よりも牛で、無口。見るからに頑固な職人。およそ、お世辞というものがない。もし、うんうん雁金のようなことがあったら、

「あんたもお金を取って仕事をしているんだろう」

ぐらいのことは言いかねない。つまり、損な性格なのだ。

仕事を持って来るのは内田屋さんと同じで月に一度ぐらい。

「今日は」

ぬうと入って来て、

「これ、お願いします」

茶を出しても世間話をするわけでもない。煙草を吹かしながら、私の仕事をぼうっとした顔で見ている、忘れたころ、

「じゃ、お願いします」

と、帰っていく。

たまたま、内田屋さんと顔を合わせたことがあった。そのときも、

「どう、仕事は。元気かね。このところ、天気が続かないね」

喋るのもっぱら内田屋さんの方だった。

「あれはね、毀れ電卓。私はそう呼んでいるの」

と、内田さんが評した。